

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2016. 1 No.87



トピックス

特別展「佐平焼」の開催
溪花院ゆかりの史跡探訪
可児市より歴史友好訪問団が来訪

資料紹介

牧家文書 梶村 明慶

研究ノート

津山藩（松平時代）の
大坂蔵屋敷について 東 万里子

トピックス

「衆楽の宴」雅に開催

(表紙写真 ライトアップされた津山城備中櫓)



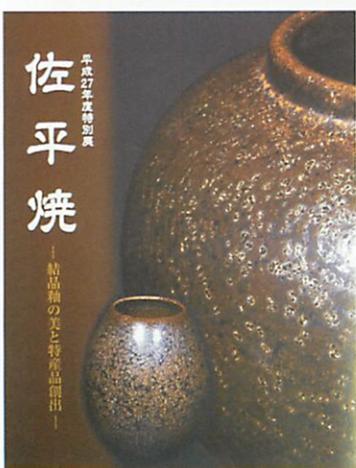
津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

特別展の開催【10月3日～11月8日】 「佐平焼 ―結晶釉の美と特産品創出―」



特別展観覧の様子



特別展図録 800円で販売中

キラキラ光る
模様がきれい
だったね。



博物館キャラクター
「ファイアー」

■今年度の特別展では、大正の終わりから昭和の初めにかけて、津山城跡の東で焼かれていた佐平焼を展示しました。

■佐平焼を生み出した浮田佐平（1867～1939）は、製糸業をはじめとして、植林製材・三極みつまたの栽培・奥津峡の観光開発など多彩な事業をなし、「津山産業界の先駆者」と言われていた実業家でした。50歳を過ぎた佐平は、郷土の名産品を増やすため、各地から陶工を呼び寄せて大規模な窯を築き、他に類のない独自の焼物を作り出そうとします。佐平は、数百年先、そして海外輸出も視野に入れていました。

■本展では、こだわりの結晶釉を用いた花器を中心に、佐平の意気込みを伝える関連資料も合わせて展示しました。

■準備段階から多大なるご協力を賜りました。二代目浮田佐平氏、浮田順子氏をはじめ関係者の皆様、また、本展をご覧くださいました皆様に、改めてお礼申し上げます。

第107回 文化財めぐり【12月6日開催】 森長継の生母 溪花院ゆかりの史跡探訪



宗永寺の森家墓所 (写真提供：津山朝日新聞社)



宗永寺の本堂内 隠元の詩偈が掛かる



西寺町の溪花院跡

見学コース(全行程・約1.8km)

- アルネ津山前(出発)↓
- ① 妙願寺・溪花院墓碑
(移転した埋葬墓、門前説明のみ)↓
 - ② 徳守神社・末社・高倉稲荷神社
(旧溪花院内の鎮守)↓
 - ③ 西寺町・溪花院跡
(新高倉稲荷神社境内地とその南東)↓
 - ④ 本源寺・森家墓所
 - ⑤ 宗永寺・本堂内位牌・森家墓所(解散)

■津山藩主森長継の生母・溪花院の50回忌供養のため、寛文4年(1664)に長継が隠元に依頼して書かれた詩偈が昨年見つかり、当館に寄託されています。そこで今回は、この資料に関する調査の中で確認できた、溪花院にまつわる市内の史跡を訪ね歩き、改めて森家の歴史を振り返りました。12月6日が溪花院の没後、ちょうど満400年の命日に当たるため、この日に開催しました。

■当日は曇りでしたが、無風であり寒くなく、歴史散策にはちょうど良い天候でした。友の会の会員に限らず広くお知らせしたところ、51人の参加者を得て盛況となりました。

■西寺町にあった同名の寺院跡では、境内地の跡を南北に歩いてその広さを体感し、本源寺と宗永寺では、巨大な五輪塔が立ち並び森家の墓所を訪れ、かつての栄華を偲びました。宗永寺では本堂内にも立ち入ることができ、溪花院の大きな位牌とともに、事前に持ち込んでいた隠元の詩偈もご覧いただきました。

■この企画をとおして、幼いうちに母を亡くした長継の追慕の念の深さを感じ取っていただけなら幸いです。多数のご参加ありがとうございました。

可児市より歴史友好訪問団が来訪

歴史友好都市縁組締結20周年記念 固い絆を再確認

【11月21日～22日】



交流会の席上で津山市長から記念誌を贈呈
(写真提供：津山朝日新聞社)

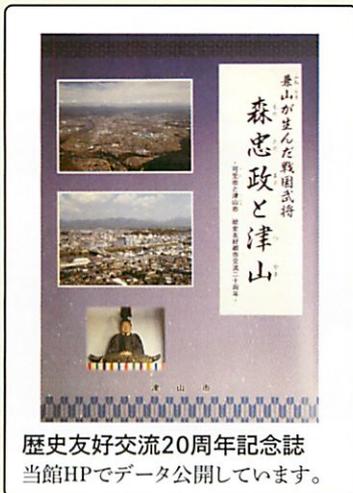


可児市の皆さん
これからも
よろしくね。

博物館キャラクター
【鶴若】



本源寺の森家墓所を訪問



歴史友好交流20周年記念誌
当館HPでデータ公開しています。



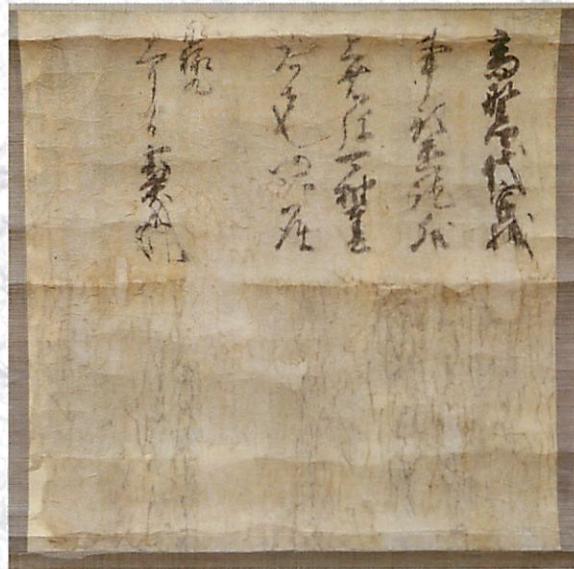
鶴山公園で記念撮影

- 初代津山藩主・森忠政が取り持つ歴史的な縁で、平成7年10月16日に可児市（旧兼山町）と歴史友好都市の縁組を締結してから今年で20周年を迎えるのを記念して、可児市から津山市へ訪問団が来訪しました。
- 兼山町商工会とその関係者を主体として公募のメンバーを含む総勢31人の一行が来訪され、初日の日中は森家の史跡めぐりとして、当館・本源寺・妙願寺の順に巡り、それぞれの文化財をご覧になりました。
- 夜は、国際ホテルで交流会が開かれ、冒頭で可児市長の親書の披露や津山市長から訪問団の代表への記念品贈呈があり、この縁組の立役者である妙願寺住職の森高正氏のご発声で乾杯した後、津山のご当地グルメを囲みながら懇親を深めました。中ほどでは津山情緒保存会による踊りも披露されました。
- 2日は衆楽園と鶴山公園を散策され、市職員で園内をご案内した後は、ちょうど開催中の「美作国大茶華会」をお楽しみいただき、昼前に津山を出発されました。
- 5月には津山市から可児市への訪問団も派遣されましたが、この1年の交流を契機として、さらなる友好の深化が期待されます。

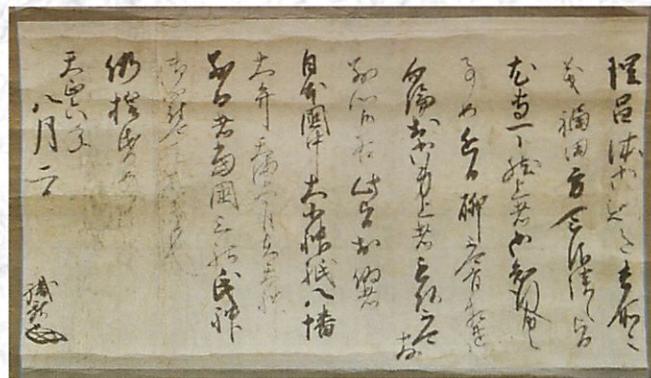
牧家文書

梶村 明慶

○浦上宗景判物



○花房助兵衛職秀誓状



高野郷代官職事預置訖、
然上者弥可抽奉公忠者也、
仍状如件、

永禄九 (浦上)
十一月十日 宗景 (花押)

※翻刻はいずれも『岡山県古文書集』より

理昌依御懇意、貴所之義福田方
可被仰談之旨尤專一候、然上者
御知行分之事、如近日聊不可有
相違候、勿論於御身上者毛頭不
可存別心候、若此旨於偽者日本
国中大小神祇八幡大菩薩天満大
自在天神、別而者当国三社氏神
御罰可罷蒙者也、仍誓紙如件、

天正六年 (花房)
八月二日 職秀 (花押)

牧家文書は主に戦国時代、現在の津山市高野地区の国人であった「牧佐介」に関する古文書群です。

8通ある戦国時代の文書の内、年紀があるものの中で一番古いものは、永禄9年(1566)で、浦上宗

景により、牧佐介が高野郷の代官に任命されたというものです。その他に、津山市の佐良山地区で起こった戦の戦功を賞した感状など、宗景からの書状が4点あることから、牧佐介はこの時点では、宗景に仕えていたことがわかります。浦

上氏は播磨、備前、美作の守護であつた赤松氏の有力家臣でしたが、このころ宗景は赤松氏から自立し、備前のみならず、美作にも独自の勢力を拡大してしま

た。その後、宗景は宇喜多直家と争うこととなり、宗景が敗れ浦上氏は没落します。そして、天正6年(1578)には宇喜多氏の武将である花房職秀から、宇喜多氏と福田理昌との和睦

に関し、間に入ったことを感謝する文書が牧佐介宛てに出されています。いつの時点からかは不明ですが、牧佐介は浦上氏から、美作に勢力を伸ばしてきた宇喜多氏側に付いたと見られます。

また、宇喜多氏が毛利氏から織田氏に鞍替えしたこともあり、天正10年(1582)に羽柴秀吉が備中高松城攻めの際に発給したと思われる牧佐介宛ての禁制状の写し、それに関わる黒田官兵衛の書状も残されています。

美作国は戦国時代には浦上氏、尼子氏、宇喜多氏、毛利氏、織田氏などの国外の勢力が争っていた場所です。これらの資料はそういった戦乱の中、地元の小勢力の動向を知る上で貴重な資料です。

なお、この資料を保管し、高野山西村の庄屋を勤めていた牧家に伝わる近世文書一通と合せて、これらの文書は津山市の重要文化財に指定されています。

津山藩(松平時代)の大坂蔵屋敷について

東万里子

はじめに

「津山松平藩町奉行日記」は、津山城下についての記録が中心ですが、読み進めていくと、大坂と関連のある記述も多く出てきます。大坂から物を売りにくる商人もいますし、津山の商人と大坂や播州の商人との金銭問題がこじれると大坂町奉行所から呼出がかります。その他にも大坂蔵屋敷へ米を運ぶ廻米に関する

こと、菜種の廻漕に関する事など、様々です。このように、大坂と津山の間で起こる問題に対応するため、津山藩は大坂に蔵屋敷を持っており、大坂には津山藩の家臣が常駐していました。広瀬台山や明治天皇の侍医頭だった岡玄卿は、津山藩の大坂蔵屋敷で生まれたと伝えられています。

「困ったときの大坂のみー津山藩大坂蔵屋敷」(『津山学ことはじめ』)で紹介されている通り、大坂蔵屋敷は津山から運ばれてきた米を販売するだけでなく、国元や江戸での消費を賄うため、商人と交渉し、金策に奔走するという重要な

役割もありました。いわゆる「天下の台所」大坂の存在は、津山藩の財政にとってどんどん大きなものになっていったと考えられます。実際に江戸時代後期には、大坂商人が津山城へ登城し、藩主とお目見えしている事例も報告されています(『年報津山弥生の里 第9号』)。

この研究ノートでは、松平家が藩主であった時期、津山藩の大坂蔵屋敷がどこにあったのかという事から考えてみたいと思います。

大坂蔵屋敷の位置

江戸時代の大坂案内本や、昭和五年に中之島について調べている『中之嶋誌』などを参考に、津山藩の大坂蔵屋敷があった場所をまとめたものが表1です。津山藩の大坂蔵屋敷といっても、その土地を津山藩が所有していた訳ではありませんでした。「名代」とよばれる大坂の商人が表面上の名義人だったと言われています。

さて、この表をみると、元禄〜元文にかけて上中之島町にあった事が

表1: 津山藩大坂蔵屋敷所在一覧

場所の記述	年代	西暦	名代	出典
上中之島町	元禄16年	1703		『中之嶋誌』p329 『大阪市史 附図』
上中之島町 (北区中之島1丁目)	元禄16年	1703		『新修大阪市史 第3巻』
同(上中之島)淀や橋	享保13年頃	1728		『享保十三年申開板 浪花袖鑑』 (『大阪市史史料 第五十三輯』)
上中之島町	元文元年	1736		『中之嶋誌』p333
常安町	延享4年	1747	深江屋惣左衛門	『中之嶋誌』p339
蔵屋敷:土佐堀二丁目 掛屋敷:江戸堀五丁目	延享5年頃	1748	深江屋惣左衛門	延享版『改正増補 難波丸綱目』 (『校本難波丸綱目』)
常安町	安永6年	1777	深江屋惣左衛門	『中之嶋誌』p339
土佐堀二丁目	安永6年頃	1777	上中之島町 深江屋惣左衛門	安永版『難波丸綱目』 (『校本難波丸綱目』)
常安町	文化3年	1806		「増修改正 撰州大阪地図」 (『大阪府の地名I』)
常安町	天保14年	1843		『中之嶋誌』p331
常安町	天保14年	1843		『武鑑』『大坂袖鑑』 (『大阪市史 附図』)
常安町	文久3年	1863		『中之嶋誌』p344

わかります。『中之嶋誌』の附図に

だと考えられます。

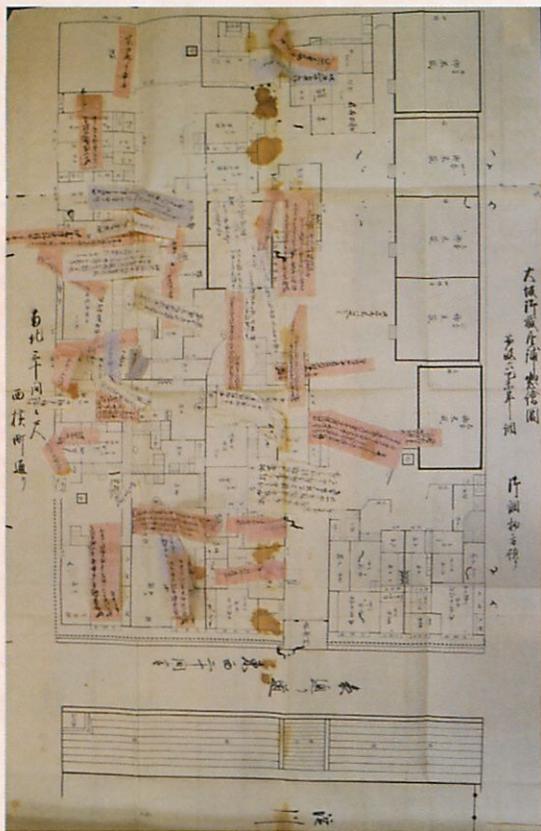
よると、中之島の東側、現在の中之島一丁目、大阪市役所がある周辺 延享〜幕末にかけては、常安町という記述と、土佐堀二丁目という記

述があります。二つの場所が書かれて
いる意味は今のところはつきりと
分かりません。常安町の中での場所
は、『中之嶋誌』などの記述と合わ
せると、中之島の西側、現在の住所
で中之島六丁目あたりだと考えら
れます。そして、先ほど出てきた
土佐堀二丁目は、この常安町の対岸
に位置しています。土佐堀について、
『大阪市史附図』の天保十四年（一
八四三）の部分を参照すると、津
山藩についての記入はありません。
しかし延享（一七四四〜一七四八）
版『改正増補難波丸綱目』によると、
土佐堀に蔵屋敷があり、土佐堀の
南に面し、背中合わせの江戸堀に掛
屋敷があったという記述があり、津
山藩が大坂において同時期にいくつ

かの拠点を持っていたと考える事も
できます。

安政六年「大坂蔵屋敷惣絵図」

大坂蔵屋敷の様子を伝える資料と
して、津山藩の藩政文書である愛山
文庫の中に、安政六年（一八五九）
「大坂蔵屋敷惣絵図」があります。
また、『中之嶋誌』318頁には、「旧
津山藩蔵屋敷の間取図で現在（昭和
五年当時）の中之島五丁目三四、
三五、三六、三七番地（江戸時代
は常安町と呼ばれていた場所）に在
る建物は大部分内部を改造されて
ゐる」と説明が添えられた絵図の写
真が掲載されています。この写真は
小さいので愛山文庫の「大坂蔵屋敷



愛山文庫「大坂蔵屋敷惣絵図」(部分)

惣絵図」とこまかく比較検討する
事はできません。また、愛山文庫の
「大坂蔵屋敷惣絵図」にはたくさん
の付箋が貼りつけてあるため、見え
にくい部分があるのですが、この二
つの図は蔵の位置や間取りなどおお
まかに一致しています。『中之嶋誌』
の間取図に方位記号が記入されてい
る事、愛山文庫の「大坂蔵屋敷惣
絵図」では左隣に通りが記入されて
いる事、『中之嶋誌』の説明書きと
川の位置関係などから、おそらく愛
山文庫の安政六年「大坂蔵屋敷惣
絵図」は、常安町にあった大坂蔵屋
敷の絵図ではないかと考えられます。

大坂蔵屋敷の火事

さて、津山藩の大坂蔵屋敷が上中
之島町にあった享保九年（一七二四）
三月二十一日、大坂では大規模な
火災が発生しました。中之島、堂島、
曾根崎一帯が灰塵に帰したと言わ
れています。この火災により、津山
藩の大坂蔵屋敷も類焼してしまいま
した。この事について、国元日記の
三月二十三日の記事では、「御蔵屋
敷不残類焼」とあり、全焼してしまっ
たことがわかります。四月一日の江
戸日記には、「大坂表去月廿一日之
大火御蔵屋敷御類焼其外御借り蔵

御米大豆等老万五千俵余焼失之由」
とあり、蔵屋敷とは別に、借り蔵
があつた事が分かると同時に、米大
豆合わせて甚大な被害があつた事が
わかります。

おわりに

大坂蔵屋敷が元文〳延享の間に移
動している様子がある事、享保九年
に全焼してしまった事などについて
確認しました。しかし、前後の経
過や、なぜ移動したのかなど、謎
は深まるばかりで、今回は明らかに
することができませんでした。

「はじめに」でも述べたとおり、
津山藩の財政にとつて、大坂の存在
は大きなものでした。また、大坂町
奉行所は西日本地域にある程度の権
限を持っていたため、大坂に常駐し
ていた津山藩の家臣は、国元と大坂
町奉行所をつなぐ役割もはたしてい
ます。大坂に常駐していた家臣の中
には、家族連れで赴任していた例も
あり、文化的な影響も見逃せません。
大坂における蔵屋敷を中心とした
津山藩の動向について、今後も調査
を進める必要がありそうです。

「衆楽の宴」雅に開催【10月17日】 ロバート・キャンベルさんを衆楽園に招いて



漢詩を作れた藩士は… (右下へ)



シンポジウムの様子



明治の曲水の宴を再現した会場



(左上より) 若殿の御前でお酒を頂戴

キャンベルさんは
TVで見たままの
気さくな人だね。



博物館キャラクター
お「パレ夫」

■10月17日、テレビでおなじみのロバート・キャンベルさんを衆楽園にお迎えして「衆楽の宴」という文化イベントが津山市観光協会の主催で行われました。昨年に美作大学での講演で来津の際、当館で曲水の宴の関連資料を調査されたのをきっかけに実現しました。

■まずは迎賓館で「曲水の宴」をテーマにシンポジウムが開かれ、約500人の聴衆の前で明治の宴の歴史的背景や主催者の意図などが語り合われた後、「衆楽雅藻」収録の漢詩が、詩吟とテノール独唱の二通りで披露されました。

■続いて曲水に場所を移し、明治3年(1870)の宴の再現です。腰元が流す大杯が目の前を通過する前に漢詩を作れた藩士は、若殿の御前に招かれ、お酒を頂戴します。当時の様子を想像も含めて再現したこの催しは、平安時代の宴の再現とは趣の異なる津山独自の画期的な試みで、詰めかけた多数の観客は、キャンベルさんと一緒に風流なひと時を満喫しました。



博物館だより「つはく」
No.87 平成28年1月1日



〔編集・発行〕津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

〔印刷〕有限会社 弘文社

入館のご案内

- 〔開館時間〕 午前9:00～午後5:00
- 〔休館日〕 毎週月曜日・祝日の翌日
年末年始(12月29日～1月3日)・その他
- 〔入館料〕 一般…200円(30人以上の団体の場合160円)
高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。

土は、津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章となっています。